

実学とは何で、何が必要か

有路 昌彦

近畿大学世界経済研究所 教授

■実学に取り組む

農学は明確な目的を持った学問体系であると考えているが、その目的とは「産業学」として産業に資するものであるということではないだろうか。筆者は研究者であると同時に 6 次産業化事業体の経営者として実学の中にあるが、そのような立場になる前後で学問に対しての見方は大きく変化している。実学に取り組むということは、経営上確実に実績を上げなければならないということであり、その為に事業を実現する上で直面するあらゆる課題の解決に学問を用いることになる。例えば市場の分析には農業経済学の手法は多用されるし、マーケティングの時には消費者分析のあらゆる手法が定量定性両面で行われる。商品開発や加工の現場では食品化学、栄養学などの分野の知識や技術が確実に必要になるし、輸送や貯蔵においても同様である。筆者の場合さらに養殖の現場から始めているので、魚類栄養学、魚病学は常に必要であるし、加えてそれが現場に適用できるものにカスタマイズされていなければならない。実学に取り組むということは、限られた期間に確実な結果を出さないといけないということであり、より実践的でより確実なものが求められていると感じる。

■これまでと今

過去実学から程遠い立場にいたとき、理論やデータの狭間で如何に高度な手法を持って（あるいは開発して）科学的な知見を世の中に示すかということに強い情熱を感じて取り組んできた。これは科学の進歩という中では極めて重要な姿勢であると考えているし、それを否定してはいけないと感じる。科学は科学として研ぎ澄まされていく必要は絶対にある。しかし一方で「それは現場の人の何に役立ったのか」というところに対しては、やっている本人としても不安を持っていたのは偽らざる気持ちである。それが実際の現場で事業を行う立場になると、とにかくひとつの大きなことに気付かされる。

■実学の中の気付き

それは実際の事業の現場では、解決されていない課題が山のように存在していて、その中で事業者は孤立しながらも工夫を重ねて経験地を高めることで課題を解決していつているということである。実学すなわち実際の現場で即時性をもって使われる学問は、まだあまりにも足りていないという実感である。例えば養殖ひとつをとってもそうである。あらゆる魚病が存在し、大切な養殖魚が減耗する。しかし多くの場合その治療方法が確立されていない。確立されていないどころか研究そのものが20年前から進んでいないことすらある。世界の最も重要な動物性タンパク質源の供給産業になっていて、我が国の地域産業として成長が見込まれる養殖業でさえ、実学が不足しているのである。食品の保存方法、加工方法などでも研究成果がないことも多く、現場の課題に対してまだまだ学問はソリューションを提示できずにいるというのが、実学の中にいて気付く大きなことである。

■ではどうすべきなのか

ではどうすべきか、その大きなポイントは4つあると考える。一つ目は研究に「誰のためか」という目的を明確にし、問題を解決するというソリューション型の研究をより増やすということである。二つ目は、研究者自身が責任を有する立場で実学の現場に入ることを推奨するということである。科学は科学、ビジネスはビジネスというわけ方は、ある意味非常に日本的であり、世界標準ではないという認識は必要であろう。三つ目は、現場の抱える課題を徹底的に見つける機能を持った組織を作るということである。これは我が国の研究の多くが「提案型」であるのに対して、現場が抱える課題を直接見聞きして集めるところからテーマを決めるというものである。全国の地方農業試験場や水産試験場などで、こういったことはこれまでも取り組まれてきたが、そういった現場に入り込む研究があったからこそこれまでの我が国の産業は成立して行っているというところは、再確認すべきに思う。予算を削減するときが一番初めに削減されていつているが、それが未来を奪っていることになっているという感覚が世の中から抜け落ちているようにも感じる。四つ目は、必要な学問は全て学んで身に着けるといふ姿勢である。研究者である以上、学術誌や書籍に接することは容易であるし、その専門性の高い研究者の言葉を聴くことも一般の人よりは容易である。ならば自分の学問領域だけで完結するのではなく、必要な学問は一通り独学でよいので学ぶことが求められるだろう。

■スピード感を現場にあわせる

そして、研究者のみであったときと、実務者をしているときの大きな違いはスピード感である。100%の制度の研究成果でなくても、今使える部分だけでも使って進めないと事業が進まないのであり、「それほど簡単ではない」「もっと熟慮が必要」「前例がない」というのは確かな事実ではあるかもしれないが、経営にはそんな悠長に時間を使える余裕はないことにも理解が必要であり。問題解決型の思考を持ち、ビジネスの現場と同じスピード感で研究を行うことが出来る研究者が増えることで「農学栄えて農業滅びる」ということを回避し、産業学として大きな貢献をすることにつながるのではないかと考える。研究者とは学問という武器を持ってきて現場で戦える戦力と考えると、そのような人は、現場のあらゆる人に頭をたたかれながらも、現場の本当の問題を解決できる切り札になるのではないかと思う。